④　上記を利用するには、事前に利用登録が必要なこと

受講者は、インターネットによるテキストのダウンロードを行い、予習、（他の講義の）復習を行い、受講する。質問は、講義中、講義後に携帯電話のWeb機能、電子メール機能を使用して行うことができる。

【講義の進め方】

講義中に質問が入った場合は、適時答える。

【課題】

開発してから実際に使用するまでの時間が短かったため、全国の人に周知する時間が無かった。このシステムを使用するには、事前に登録が必要なこと、操作が複雑なことなどがある。

資料編116ページに詳細報告を掲載。

（４）衛星（ライブ放送）＋インターネットテレビ会議システム (CU-SeeMeおよびMeeting Point)

筑波大学大学院

【概要】

筑波大学大学院博士課程教育学研究科授業『教育工学演習II』他３授業（各３回全12回）は、１月17日から２月６日にかけて行われた。会場は、筑波大学をメイン会場とし全国11か所の大学、社会教育施設を使用して行われた。１回の講義には、３から４か所の施設で受講した。各受講者には、ノートパソコン１台、PHS機能付き携帯電話を１台、USB-CCDカメラ１台を貸与した。講義の時間帯は、18:00から20:00と、受講者の勤務後に行った。

【方法】

質問に使ったシステムは、インターネットテレビ会議システムである。これは、ノートパソコンとPHSとUSB-CCDカメラを組み合わせてテレビ会議の機能を持たせたもので、テレビ会議専用のシステムではない。そのため、事前に機材を組み立てる必要があった。通信はPHS（無線）を使用して行うため、テレビ会議専用の回線を敷設する必要はない。ただし、PHSの電波が届かない施設では、ISDN回線を敷設した。

通常の１対１で行うテレビ会議とは異なり、最大で10か所(ソフトのライセンスの制限上)の同時会議が可能である。ただし、今回使用したインターネットの回線は64kbpsだったので、物理的に４か所までが限界であった。それ以上の場合はシステムの動作が不安定になった。

【講義の進め方】

講義前には、システムの音声チェックなどを行うため30分前からネットワークに接続し、筑波大学大学院と各受信会場間で調整を行った。

講義中は、適時講師の指示によりテレビ会議システムを使用し、場合によっては遠隔地からのレポートの発表（最大20分）も行った。

講義後は、システムの操作やネットワークの状態、講義の内容などについてミーティングなどを実施した。

【課題】

受講者の使用機材に対する基礎的知識にばらつきがみられた。初日のみ全受信会場にシステムのサポート要員をつけたが、２日目からパソコンを立ち上げられない、PHSが使えないなどの問題が出ていた。

講義が18:00からであったため、各施設の担当者は残業となってしまった。また、PHSの回線が18:00頃から混雑するため、講義開始少し前からネットワークが不安定になり、システムがダウンすることがあった。

テレビ会議システム使用時には、音声がハウリングを起こしてしまうため、エル・ネット放送の音声をオフにして、尚かつ発言者はヘッドフォンの着用が必要であった。そのため、２人以上の受講者がいる施設では、質疑内容をモニターすることができなかった。

資料編120ページに詳細報告を掲載。

（５）衛星（録画放送）＋インターネット掲示板

愛知教育大学

【概要】

愛知教育大学講座「作図ツールとインターネットで数学の授業を変えよう」（全１回）は、平成12年10月27日に行われた。講義は通常の放送形態だったが、講義終了後に“インターネット掲示板”に質疑応答が行える方法をとった。

【方法】

インターネット掲示板は、オープンカレッジのホームページ上からリンクが張られているシステムである。Web上から質問ができるため、ホームページが見られれば、メールアドレスを持っていなくても質問は可能である。質問された内容は、Web上に公開が可能と講師が判断した場合は、質問に対しての回答をWeb上に書き込むことによって質問と回答を対でWeb上に公開が可能である。

質疑応答表示例（http://www.opencol.gr.jp/board/1100101/kait.html）

【講義の進め方】

講義は通常の形式で講義を行った。インターネット掲示板への書き込みは、１件あった。

【課題】

インターネットによるコミュニケーションとしては電子メールが一般的であるが、個人のメールアドレスが公開されてしまうなど問題があり、Web上の掲示板としてコミュニケーションをとることとした。そのため、質問の有無を、講師が回答用のページに毎回アクセスしないと確認できない（回答用ページもプライバシーを守るために非公開である。担当講師にのみURLを電子メールで連絡する。）。

今回は質問が可能な期限を明記していないが、今後は運用上、「放送後３日以内は質問が可能」などといったルールを定める必要があると思われる。

（６）衛星（録画放送＋ライブ放送）＋テレビ会議システム＋インターネット掲示板

佛教大学

【概要】

佛教大学講座『少子・高齢社会への対応』（全２回）の第１回「高齢化の現状と今後の課題」（永和良之助佛教大学教授）は、１月20日に放送された（第２回は、別の質疑システムのため、別途記述）。主会場を京都市立永松記念教育センターとし、主会場にいる講師に対して、副会場の広島県立生涯学習センターの受講者から、講義放送後、テレビ会議システムを使って質疑を行った。また放送終了後の質疑を保障するため、インターネット掲示板も用意した。なお、副会場の広島県立生涯学習センターは「モデル事業」として、この講座を実施している。

【方法】

利用したメディアは、講義中は衛星、質疑時は衛星とテレビ会議システムを組み合わせた双方向通信で行った。質疑部分は著作権契約レベル「空欄」で放送した。また、講義終了後の質疑として、インターネット掲示板を使って質問を受けた。

（http://www.opencol.gr.jp/board/0200101/index.html　参照）

【講義の進め方】

事前に収録しておいた１時間の録画講義を放送後、10分休憩し、テレビ会議システムによる質疑応答の時間を40分間とった。質疑応答終了後は10名程度の小集団での話し合いを行い、質問やもっと深く学習してみたいことなどを、インターネット掲示板へ書き込んだ。

【課題】

受講者からは「講義中の質問だけでは時間が足りない、質疑応答時間がもっと欲しかった。」という意見があった。インターネット掲示板へは７件の書き込みがあった。今回は、講義終了後の質疑のために、インターネット掲示板は講義開始直前にWeb上にアップしたが、予習という意味から、放送前に講師への質問や相談を受け付けることも考えられる。

この講座の副会場での運営は、ボランティアの方が主にかかわって行われた。双方向システムを運用するには、担当者が必要となるが、今後は誰が双方向システムを操作するのか検討する必要があろう。ボランティアからは、衛星通信とテレビ会議システムを組み合わせた双方向通信については、「当初、不安だったが、思ったよりスムーズに行えた」、「先生とリアルタイムで話ができたのが非常によかった」、「今回のテレビ会議システムと衛星を使った双方向の運用は初めてだったため、事前に講師の方と実際のシステムを使った上での打ち合わせ時間も設けた方がよりよかった」などの意見がだされていた。習熟していないメディアについては事前に操作の講習をするなど、事前の対策も必要と思われる。また、一般的に講義の進行が把握できないと遠隔地のシステムを操作する担当者は不安になるようである。

（７）衛星（ライブ放送）＋電子黒板

常磐大学

【概要】

常磐大学講座「コミュニティーの振興を考える－共生のまちづくりを目指して－」（全３回）は、第１回平成12年12月11日（ライブ放送）、第２回12月18日（ライブ放送）、第３回平成13年１月16日に行われた。特色は、第１回、第２回の講義中に通信機能の付いた電子黒板を利用した質疑応答を行ったことである。会場は、講師のいる国立科学博物館を主会場とし、学生のいる常磐大学を副会場とした。なお、この講義は大学の授業をそのまま公開講座として放送する遠隔公開授業の形式をとっている。

【方法】

質問に使った電子黒板は、ホワイトボード上に圧力を関知するセンサーが付いており、記述した内容をコンピュータにデジタルデータとして送ることができる。コンピュータからは、映像情報としてビデオプロジェクターや、デジタルデータとして遠隔地に送信することが可能である。

常磐大学の電子黒板に記述された質問内容はノートパソコンを経由して、PHS（または携

帯電話）から、国立科学博物館に送られる。国立科学博物館では送出のときの順序と逆に、PHS（または携帯電話）で受信し、コンピュータを経由してプロジェクターで、電子黒板上に投影される。国立科学博物館の電子黒板と常磐大学の電子黒板上には、同じ内容がリアルタイムで表示されることになる。

【講義の進め方】

質疑応答の時間はあらかじめ決められていた。これは電子黒板を使用して通信する場合、PHSの連続通信時間（５時間以上）に対して携帯電話の通信時間が１時間前後と短かったために、講義中１時間30分つなぎ放しにできないからである。PHSの利用であれば講義中の連続接続も可能である。講師のエル・ネットからの問いかけに対し、受講生は名前を記述してから、質問を記述した。それに対し講師は、エル・ネットから口頭で回答を行った。

【課題】

電子黒板の使用方法を覚える必要がある。記述するため、質問をまとめる力が必要とされる。記述する速度で情報が提示されるため、多少遅いと感じるが、パワーポイントのように一気に情報が提示されて未消化になるよりは、講義に集中できたようである。

PHS（64kbps）と携帯電話（9.6kbps）の通信速度の違いは感じられなかった。今回は電子黒板で文字を主に扱ったためであろう。画像情報などボード上で変化する情報が多ければ、時間がかかることになる。

（８）衛星（ライブ放送）＋デジタルカメラ機能付き携帯電話

島根大学

【概要】

島根大学講座「たたら製鉄と出雲の地域文化」（全３回）は、第１回１月28日（日）、第１回再放送２月２日（金）、第２回２月３日（土）、第３回２月４日（日）（ライブ放送）に行われた。この講座の進め方の特色は、１回目～３回目まで各２時間の講義を放送した後、第３回目の講義終了後に、１回目～３回目までの講師によるシンポジウム形式の質疑応答の時間を１時間設定したことである。当日は主会場の島根大学に車載局を持ち込み、質問は地域連携協力先である県内４か所の公民館（副会場）の受講者から受けた。この事業は「モデル事業」の一環として行われた。

【方法】

質問に使ったメディアはデジタルカメラ機能付き携帯電話である。このメディアは平成11年末に発売され、現在では数社から発売されている。携帯電話に付属の簡易カメラで10万画素程度の画質のデジタル写真を撮り、これを携帯電話のメール機能により、インターネット上の特定のメールアドレスに添付ファイルで送るというものである。事前に、使用

についての簡易マニュアルを作成し、携帯電話、簡易カメラとともに、施設担当者または受講者へ配布し、実際に写真を送る練習をしてもらった。

【講義の進め方】

当日は副会場の２名の方から質問を受けた。事前に質問者の顔を撮影し、携帯電話により、インターネット上のメールに送ってもらうこととした。番組の質問中は会場内に置かれたパソコンの画面をダウンコンバートして、エル・ネットに流した。音声は会場内の電話から副会場の携帯電話を呼び出し、質問中は同じくエル・ネットに流した。質問に回答する講師の画像、音声はエル・ネットで放送した。

【課題】

全体的には、どんな方が質問しているかがわかり、また、音声も携帯電話により、ほぼ質問内容は把握できる程度の音声の品質は保持され、効果的な質疑応答であったといえる。ただし、副会場での質問中に、質問者の音声が、エル・ネットに載って会場に数秒遅れで届くため、質問者が話しづらいという状況があった。また主会場でも、同じく聞きづらい状況があった。対策としては、副会場で質問者が発話中、会場内のエル・ネットの音声を切ったり、または別室でイヤホンを使って行うといった方法が考えられる。

３．双方向質疑等の方法について

推進委員会委員
浅　井　経　子

双方向質疑等の導入の仕方を、前述の（１）から（８）の事例に基づき整理すると、次の表のようになる。

表　双方向質疑のメディア活用と方法の例

大学名		宮崎大	淑徳短大	大阪府立大	筑波大大学院	愛知教育大	佛教大	常磐大	島根大
講義中の質疑等	メディア	ＴＶ会議Ｓ(ＩＳＤＮ)	ＴＶ会議Ｓ(ＩＳＤＮ)サブ・サテライト会場からはＦＡＸ	メールｉモード(大学独自のシステムによる)	インターネットＴＶ会議Ｓ(ＰＨＳ・ＩＳＤＮ)		ＴＶ会議Ｓ(ＩＳＤＮ)	電子黒板(ＰＨＳ・携帯電話)	デジタルカメラ付携帯電話
	導入方法		20分講義後に10分質疑(それを４回)	随時質疑	講師の指示により発表・質疑		60分講義10分休憩40分質疑	決められた時間帯	
	その他				主会場と４か所の多地点で実施			電子黒板に名前と質問を記述	事前に質問者を決めて顔を撮影
講義後の質疑等	メディア	ＦＡＸ・掲示板・メール	ＦＡＸ	メール(大学独自のシステムによる)		掲示板	掲示板	ＦＡＸ・掲示板・メール	ＦＡＸ・掲示板・メール
	その他		講座後に地元講師による関連講座				講座後に小集団で話し合い		

注.「講義後の質疑等のメディア」は大阪府立大学を除き、高等教育情報化推進協議会が用意した。

双方向質疑等の方法は、この表にあげた方法以外にもいろいろあるであろう。ここでは上記の事例に基づき、若干のコメントを付け加えておくことにしよう。

① 知識・情報提供型の講座の場合は講義後に質疑等を受けるシステムでもよいが、参加型の講座の場合は講座中に質疑等を受けるシステムが向いている。

② 大阪府立大学の場合は、講座前にも掲示板で質疑等を受けるシステムである。このようなシステムを活用することにより、受講希望者からの質疑や意見を生かして講師が講座を組み立てる方法も考えられる。

③ 上記①と②を組み合わせて、２回連続の講座の場合、
講座（講義のみ）→講座後の質疑等→双方向の講座（講義と質疑等）→講座後の質疑等といった方法も考えられる。

第２章　モデル事業

Ⅰ．モデル事業の目的と実施体制

推進委員会副座長
山　本　恒　夫

１．モデル事業の目的

本モデル事業は、平成12年度、高等教育情報化推進協議会が行う「教育情報衛星通信ネットワーク高度化推進事業」の一環として行われた調査研究である。

平成11年度はエル・ネット「オープンカレッジ」の実施可能性を探ったが、利用については全国の受信施設を備えた社会教育施設等に通知し、利用方法については施設側に委ねたのみであった。そのため、多くは受講者募集のみで、まだあまり効果をあげる工夫もなされなかったが、中にはうまくこれを活用して効果をあげた県・市もあった。

そこで、平成12年度は利用態勢についての実験的研究を行うこととした。従って、その目的は効果的にエル・ネット「オープンカレッジ」を活用しているいくつかの事例を取り上げ、有効な方法を探るところにある。

２．実施体制

本事業実施のために、「モデル事業実施委員会」を設置した。

また、モデル事業実施地域を定め、７地域に依頼することとした。それが「Ⅲ．事例」にある７地域である。各地区では「地区モデル事業実施委員会」を設置して、事業の計画立案、実施に当たった。

具体的な実施計画の立案のために、「モデル事業実施委員会」で検討を行い、利用態勢については連携型、メニュー選択型、新規開発型の３つのタイプを設定し、そのいずれかで事業を実施してもらうように「地区モデル事業実施委員会」に依頼した。

「モデル事業実施委員会」と「地区モデル事業実施委員会」は事業実施前に協議を行い、意志の疎通を図った。

また、「モデル事業実施委員会」委員は、一部の事業につき視察調査も行った。

さらに、事業終了後には、「モデル事業実施委員会」の報告会を開催し、「地区モデル事業実施委員会」と意見交換を行うなどして、研究の推進を図った。

Ⅱ．公開講座のタイプ

推進委員会副座長
山　本　恒　夫

Ⅰで述べたように、今回の実験的研究では、連携型、メニュー選択型、新規開発型の３つのタイプを設定し、事業を行った。それぞれのタイプは次のようになっている。

（１）連携型

特定の大学と連携をとり公開講座を開設する。

その方法としてはエル・ネット「オープンカレッジ」を利用する。

（２）メニュー選択型

従来から公民館等で施設独自の講座を開設していたところへ、エル・ネット「オープンカレッジ」の講座を加える。

（３）新規開発型

エル・ネット「オープンカレッジ」を利用して、新しい学習支援の方法を開発する。その際、子ども放送局、家庭教育セミナー等の番組の利用も考慮する。

これに基づいて各地で計画を立てた結果は次のようになった。

（１）連携型

青森県エル・ネット「オープンカレッジ」モデル事業実施委員会

オープンカレッジ尾花沢市実行委員会

広島県エル・ネット「オープンカレッジ」モデル事業実施委員会

（２）メニュー選択型

長野県松本市エルネットモデル事業実施委員会

島根市町村コミュニティカレッジ協議会

（３）新規開発型

岐阜県図書館「教育情報衛星通信ネットワーク高度化推進事業モデル事業」実施委員会

国立赤城青年の家「青少年教育施設エル・ネット活用推進連絡協議会」

「Ⅲ．事例」は、このようなタイプの実験的事業である。

Ⅲ. 事　例

１．魅力的な講座を目指して
～ エル・ネット「オープンカレッジ」の可能性 ～

モデル事業実施委員会
（青森県総合社会教育センター）

１．エル・ネット「オープンカレッジ」への期待

居ながらにして全国の大学公開講座を受講できるエル・ネット「オープンカレッジ」は、大都市に比べて学習機会の少ない青森県にとって非常に魅力的なシステムである。新しい試みであるため、改善や工夫すべき点もあるが、衛星通信という先端技術が広げてくれる可能性に大いに期待するものである。

（１）あおもり学講座とエル・ネット「オープンカレッジ」

青森県では、県民カレッジの直営講座である「あおもり学講座」を、平成13年度からエル・ネット「オープンカレッジ」を利用した講座に組み替える。これは、５年目を迎える同講座の刷新に、エル・ネット「オープンカレッジ」の活用が有効であると考えるからである。

あおもり学講座は単なる「地域学」ではない。地域に根ざした現代的課題の学習の場である。それは、学習を知識の習得に留めず、様々な課題を自分たちの生活する地域の問題としてとらえ、考え、解決していこうというものである。

（２）新あおもり学講座

現在は、２時間×７コマの対面講座が６地区で実施されているが、新あおもり学講座では、エル・ネット「オープンカレッジ」の視聴３コマ＋対面講座１コマを１セットとし、各地区ごとに２セットの実施を予定している。これによって、「多角的な視点と広い視野」を持つとともに、対面講座との組み合わせによって、これまで以上の効果を引き出したいと考えている。

２．実用化を目指した実験

実際に、エル・ネット「オープンカレッジ」を利用した講座を実施するとなると、少なくともこれまで実施してきた対面講座の「代用品」にするわけにはいかない。弱点を克服した上で、対面講座にはない新たな魅力を見出せなければ、エル・ネット「オープンカレッジ」を導入する意味がない。

（１）双方向性の確保について

エルネット「オープンカレッジ」の特徴は、衛星通信を利用するところにあるわけだが、その最大の特徴が弱点とも捉えられることもある。対面講座と比較した場合、①臨場感に欠ける②参加感に欠ける③質問ができない④講師との一体感がもてない等の問題である。しかし、これらの多くは、工夫次第で解決できる可能性が高い。いずれも、双方向性が確保されないことが主たる要因と考えられるため、いかに双方向性を確保するかが重要な課題であるとともに、どの程度までが許容範囲かを明確にする必要がある。

[実　験]　様々な形の「双方向」の効用と問題点を検証するため３種類のモデルを設定した。1コマ＝90分の講座中に、テレビ会議システムを利用した４回の質問タイムを設けて質疑応答を行う。そのうちの２回が青森県に割り当てられた。

モデルⅠ（メインサテライト会場、青森市）

・テレビ会議システムを利用して、直接、東京会場と質疑応答をする。

・サブサテライト会場からＦＡＸで送られた質問を取りまとめる。

モデルⅡ（サブサテライト会場、十和田市、藤崎町）

・ＦＡＸをメインサテライト会場に送ることによって、間接的に質問ができる。

モデルⅢ（単独受信会場、むつ市）

・質問のできる環境は用意されていない。

（２）対面講座との組み合わせによる相乗効果

いかに双方向性を確保したとしても、遠隔学習において問題を深く掘り下げることはかなり困難である。また、身近な地域の問題として考えることも難しい。そこで、対面講座を組み合わせて欠点を補うこととした。さらに、その内容や方法を工夫することによって、相乗効果による新しい魅力を引き出すことを試みた。

[実　験]　エル・ネット「オープンカレッジ」を３コマ視聴した後、４コマ目に対面講座を用意する。対面講座は、実践的な立場の方をコメンテータにした「ディスカッション」の形式とし、学習者の発言を多く引き出すようにする。

（青森会場の例）

テーマ「福祉社会を生きるⅡ」

①市民主体性の形成とボランティア活動（淑徳短大・エルネット視聴）

②ボランティア活動の原理と原則　　（淑徳短大・エルネット視聴）

③介護保険制度と社会福祉の展望　　（淑徳短大・エルネット視聴）

＋

④福祉社会の中の市民の役割　　（ＮＰＯ事務局長・ディスカッション）

（３）新しい形の運営方法について

今回のモデル講座においては、運営面の実験も合わせて行った。それは、「選んで視聴」というエル・ネット「オープンカレッジ」では、とかく受身になりがちであり、それが様々な面でマイナス要素になりかねないと考えたからである。

[実　験]　これまでの「あおもり学講座」では、県民カレッジ事務局と各教育事務所が

運営を行っていたが、今回はこれに、市町村教育委員会と学習者グループを加え、それぞれの役割分担を明確にした運営を試みた。また、各地区ごとに４者による打合せ会議を持って連絡調整を行った。

３．事業の成果

（１）双方向性の確保について

モデルⅠが効果的であることは既に実証済みである。今回はサブサテライト会場の質問を取りまとめるという役割も担ったわけだが、進行等に問題はなく、質問内容に幅がでるなどのメリットもあった。モデルⅡでは、間接的な形ではあるものの「質問が出来る」ということで、講師や他会場との一体感を持つことができ、参加意識を強くもつことができた。また、モデルⅢにおいても、他会場が代弁者となることによって同様の一体感を持つことができた。これらより、サブサテライト会場はもとより、方法によっては単独受信会場においても、かなり大きな満足感を得られることが確認できた。

（２）対面講座との組み合わせによる相乗効果

視聴後の対面講座は、予想をはるかに越える大きな効果をもたらした。当初、講義者に直接質問ができないことを補うものと考えられていたが、実際には全く新しい学びの空間を作り出すこととなった。地域内で活躍する実践的な方をコメンテータにしたこと、学習者の発言の機会を多くしたディスカッション方式にしたことが良かった。これによって、学習をさらに深め、身近な地域の問題として意識することができた。

（３）新しい形の運営方法について

初めての試みのわりには、トラブルもなくスムーズな運営ができた。また、この取り組みを通じて４者の共通理解が図られ、来年度以降の運営の形が見えてきた。現時点で想定される役割分担は次のとおりである。

①県民カレッジ事務局は、全体計画と地区間の連絡調整を行うとともに、大学や国などへに対する窓口となる。②教育事務所は、各地区における中心機関として、打合せ会議を招集して連絡調整を図る。また、チラシの作成や４コマ目のコーディネートなどの面で関わる。③市町村教育委員会は、地域住民への窓口として、受講受付や広報誌等でのＰＲを行い、当日は講座の運営と進行を担う。④学習者グループは、学習テーマの設定に大きく関わるとともに、当日の運営補助なども行う。

いずれにしても、「みんなで作る」という姿勢が重要であり、それが運営をスムーズにするだけではなく、講座の魅力やレベルアップにもつながる。

４．今後の課題

エル・ネット「オープンカレッジ」は様々な問題を抱えており、現在のままでは実用化するのに十分な状態とは言いがたい。しかし、大きな可能性を秘めていることも確かであり、取り組みによっては短所を補うだけでなく、エル・ネットならではの効果をあげることも可能である。そのためには、エル・ネット「オープンカレッジ」の発信者、受信者、運営者が、さらに工夫と努力をすることが必要である。

（１）発信者（大学）が取り組むべきこと

エル・ネット「オープンカレッジ」の成否の第１の鍵は大学の姿勢にある。いかにして質の良い講座を作るかが最大のポイントであろう。そのために必要なことは、次の①～⑤のようなことであるが、これらをクリアできなければ、対面講座を超えることは出来ない。

①テーマの精選

どういう形態の講座であっても、タイムリーで興味深いテーマを設定することが重要である。エル・ネット「オープンカレッジ」でも例外ではない。

②講義技術の向上

わかりやすい講義であることも重要な要素である。レベルを下げることではない。学習者が大学に求めるものは学術的に高度な内容である。それをわかりやすく解説する技術が求められる。カメラに向かって原稿を棒読みするなどは論外である。

③映像をうまく使った講座づくり

エル・ネット「オープンカレッジ」においては、対面講座以上に視覚に訴えることを考えるべきである。写真や動画、図、ＣＧなどを効果的に組み込むことによって、対面講座とは別の魅力を作り出すことが可能となる。講義者の顔はたまに出てくる程度でいい。

④双方向性の確保

今回の実験によって、双方向性の確保がいかに重要であるかが確認された。そのこと

を十分に認識して講座を作ることである。必ずしも、リアルタイムの質疑応答でなければ駄目だということではない。また、通信を利用した質疑応答でなくてもかまわない。仮に録画であっても、会場に受講生を入れ、質疑応答の様子を撮影するだけでもそれなりの効果はある。

⑤通信の特性を生かす

通信のメリットは遠隔地に情報を伝達することだけではない。特に双方向性については大きな武器として活用すべきである。用いるのは衛星でもテレビ会議でもインターネットでも可能である。

単なる質疑応答の手段としてではなく、もっと積極的な活用を考えたい。たとえば、あるテーマについて全国各地の意見や考え方の違いなどを取り上げ、それを軸に講座を組み立てることもいいだろう。

（２）受信者（地域）が取り組むべきこと

放送を流しっぱなしにするのでは魅力に欠ける。そこで、視聴で完結するのではなく、エル・ネット「オープンカレッジ」を組み込んだ講座として総合的に考えるべきである。青森県における取り組みの想定は前述のとおりだが、重要なことは学習者の位置付けである。学習者の要望や意見を最大限に尊重することが、魅力的な講座をつくる基本である。したがって、地域において真っ先に取り組むべきことは、学習者が中心となる運営の仕組みを構築することであろう。

（３）運営者（国）が取り組むべきこと

エル・ネット「オープンカレッジ」の運営者が第一に取り組むべきことは、テーマや内容、放送日時等の情報を迅速に流すことである。単なる視聴ならともかく、地域において『エル・ネット「オープンカレッジ」を組み込んだ講座』として再構築するには、現状の２か月前ということでは話にならない。最低でも３か月以上前である必要があるし、本来であれば年度当初にすべての日程を公表すべきである。

また、発信者と受信者の間をつなぐことも重要だ。受信者が取りまとめた学習者の声を、発信者である大学に伝える仕組みを整えることが求められる。さらに、インターネットを利用した掲示板やフォーラムの運営など、学習活動をサポートするシステムの整備に力を入れる必要がある。

５．あおもり学特別講座　福祉社会を生きる　－Ⅱ－　アンケート結果

（１）あなた自身についてお知らせください。（回答数：５７）

①　性別

男	女
31 人	26 人

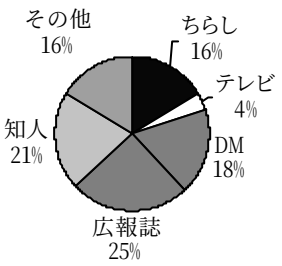
②　年代

40 代	50 代	60 代	70 代
3人	5人	31 人	18 人

③　地区別

青森会場	十和田会場	藤崎会場	むつ会場
24 人	14 人	10 人	9人

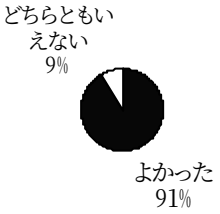
（２）あなたは、この講座があることを何により知りましたか。（回答数：５７）



	ちらし	テレビ	DM	広報誌	知人	その他
全体	9	2	10	15	12	9
青森	6	0	7	3	3	5
十和田	2	0	3	5	0	4
藤崎	1	2	0	5	2	0
むつ	0	0	0	2	7	0

（人）

（３）講座で放送を利用することは、どうだったでしょうか。（回答数：５７）



	よかった	どちらともいえない	あまりよくなかった
全体	52	5	0
青森	22	2	0
十和田	13	1	0
藤崎	8	2	0
むつ	9	0	0

（人）

主な理由

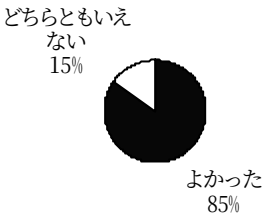
＜よかった＞
- 東京その他の会場と結んでの講座でよその地域の方々の考え方が分かってよかった。（むつ）
- 区切りながら質疑応答時間を設けたのは大変よいことだと思った。（むつ）
- 地元にいながら専門家の講演を聞けるのがとてもいい。（藤崎）
- 知識は媒体の如何にかかわらず伝わるものだと知りました。（藤崎）
- 双方向での質問の時間がたくさんあって効果を上げたと思う。（青森）
- 決められた時間内で終わる。（十和田）
- 時々利用している公民館で聴講できたことは大変良かった。（十和田）

＜どちらともいえない＞
- 講師による。（青森）
- 生の講座より疲れを感じた。目の関係かも。（十和田）

（４）放送を利用した講座をよりよいものにするために、どのような工夫をすればよいでしょうか。

- 画面の大きさ、音量の調整等が考えられる。（十和田）
- 講座終了後にビデオとして再視聴できる場が借りられるようにしてほしい。（十和田）
- ２時間続けるのは少しきつい。１時間毎に休憩をとる。（十和田）
- 電話回線使用とのことで画面がはっきりしないが今後改善に期待します。（青森）
- 県民カレッジを母体として学友会等を組織して、学友会が主催となり、自主的に運営したらよいのではないでしょうか。（藤崎）
- 質問をできるように願いたい。（むつ）
- 受講者にヒットする内容の講座をつくること。（むつ）
- 実践的な活動場面などを映像で紹介しながらの進行の導入。（むつ）
- テキストを事前に配布していただければ学習上利点があると思う。（青森）

（５）放送を利用した講座で、質疑応答ができることは、どうだったでしょうか。(回答数：４８)



	よかった	どちらともいえない	あまりよくなかった
全体	41	7	0
青森	23	1	0
十和田	10	4	0
藤崎	8	2	0

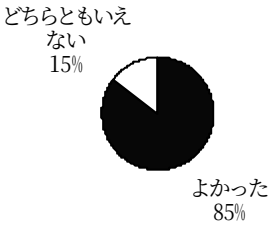
（人）

主な理由

＜よかった＞
- 疑問点に解答がありよい。（十和田）
- 広範囲に考えが聞けてよかった（十和田）
- 即、生で答えていただけるのでとても良かったです。（十和田）
- テレビであるから話しやすい。（青森）

＜どちらともいえない＞
- 電話回線による衛星放送のために画質と音声がよく読みとれなかった。（藤崎）
- 時間がない様で沢山の質疑応答ができない。（十和田市）
- 急に質問ありませんかと言われてもよく頭に入れていないと答えられない。（青森）

（６）実践的な方をコメンテーターとした４コマ目の講座は、どうだったでしょうか。(回答数：４６)



	よかった	どちらともいえない	あまりよくなかった
全体	39	7	0
青森	17	3	0
十和田	6	3	0
藤崎	8	1	0
むつ	8	0	0

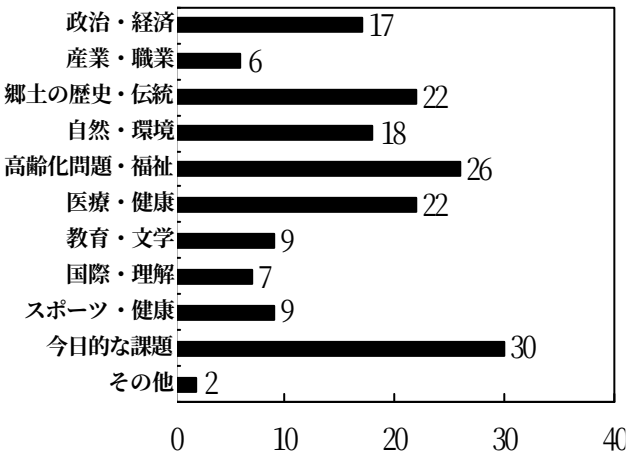
（人）

主な理由

＜よかった＞
- 具体的、現実の実情を聞くことができた。（むつ）
- 目の前でいきいきしたお顔が見えて楽しくお話を聞けてよかった。（藤崎）
- 話し合いの場は良かったです。（青森）
- 身近かな問題を質問できた。（十和田）
- 現状がわかってよかった。（十和田）

＜どちらともいえない＞
- テーマの幅に広さがあるので分野を狭くしたら議論しやすいと思った。（青森）

（７）あなたは、今後どのような内容の講座をお聴きしたいと思っていますか。(複数回答可)



	全体	青森	十和田	藤崎	むつ
政治・経済	17	10	2	2	3
産業・職業	6	4	2	0	0
郷土の歴史・伝統	22	8	3	5	6
自然・環境	18	6	5	5	2
高齢化問題・福祉	26	13	4	4	5
医療・健康	22	11	5	3	3
教育・文学	9	5	1	1	2
国際理解	7	3	2	1	1
スポーツ・趣味	9	3	1	1	4
今日的な課題	30	12	8	4	6
その他	2	0	1	1	0

（人）

（８）講座全般について、御感想・御意見がありましたらお聞かせください。

・放送による講座については、当初疑問を抱いておりました。はたして、うまくいくものかどうか、おそらく一方通行のＴＶのようなものだと思っていましたが、双方向で十分、講師の話を聞くことができ大変よろしいです。また、機会があれば受講したいです。（青森）

（青森県総合社会教育センター　指導主事　坂本　徹）

２．『西洋美術史講座』－ギリシャ美術への誘い－

オープンカレッジ尾花沢市実行委員会
（山形県尾花沢市学習情報センター）

１．事業の概要

人口22,000人の小さな市であり、市民図書館との複合施設になっている。学習情報センターとしては初めての公開講座であり、また、オープンカレッジへの理解をもってもらうには、まず、大学を知ってもらう必要があると考えた。そのためには、県内の大学と連携し「一日大学生」として体験してもらうことを計画した。

「一日大学生 」としての流れは、次のとおりである。

① 尾花沢市学習情報センターで、衛星通信利用の『西洋美術史講座』を、150インチの大型ハイビジョンスクリーン映像で60分視聴。

② バスで東北芸術工科大学に移動し、学生食堂にて学生達と触れ合いながら食事し、学生気分を体験する。

③ 特別講義として、篠塚千恵子教授よりスライドを利用しての直接指導をいただく。約90分の補足レクチャーを受けた後、質疑応答の時間をとり、より理解を深める。

④ 大学内の見学や、卒業制作展の準備風景などに接し、大学への理解を深める。

⑤ バスで尾花沢市学習情報センターに移動。閉校式でアンケートを依頼し、終了する。

従来通りの公開講座と対面式講座の二方式を合わせた内容である。

２．事業の成果

『西洋美術史講座』という、少々堅苦しい講座を選定したため、参加人数の不安も大きかったが、すぐに30名の定員となり、結局、予定を変更し一般公募60名、その他関係者11名計71名の大集団となった。参加者の年齢層も20代から70代と幅広く、オープンカレッジへの期待の大きさが伺えた。

事後に行ったアンケート結果を集約すると、参加した人全員がほぼ満足しており、次回も参加したい、ぜひ計画してほしい、という感想がほとんどであった。「もっと勉強して、みんなでギリシャまで行こう！」という声まであがったほどの盛況であった。

また、今回の続き『イタリアギリシャ』を、今度は尾花沢でやりたい！ という教授の話も聞かれた。

講義の内容についても、ほぼ満足してくれたようだが、やはり映像だけの講義よりも、午後の特別講義で直接質疑応答できたことが、より満足感を与えてくれたようである。今回は、二会場を利用しての“一日大学生”という体験を組み入れた内容であったが、それで満足出来た人、逆に講座を２～３回と継続し、真剣に勉強してみたいと考えている人等いろいろであった。また、テキストについても、字が小さすぎる、写真をもっと鮮明にしてほしい、多

少画像の乱れがあり教授の視線が合わない等、端的に答えてくれた意見も見られた。

今回、このような成果を得られたことの要因として、次の事が考えられる。

① 公開講座を視聴するだけでなく、大学まで行き直接指導を受けられたこと

参加の目的を、日常体験出来ない大学に行くこととしていた人も多かったが、参加してみて講座の良さが改めてわかったという人も多い。

いずれも教授の直接指導に深く感動しており、映像だけの講座よりも一体感となれる双方向性を強く望んでいるのが明確である。

② 広報活動の強化

ポスター（Ａ２版カラー）150枚、チラシ（Ａ３版カラー）6,500枚印刷市報への掲載、市内全戸（6,000枚）へのチラシ配布、県内各図書館・各施設・教育関係者・各小中学校・各保育園・書店・その他へのポスターとチラシ配布。各新聞社・放送局への報道依頼。図書館内のチラシと放送による案内。等いろんな方面への広報に力を入れた。

③ 市女性文化センター女性会議への協力依頼

サークルの中から実行委員になっていただき、全面的に協力してもらう。

④ コーディネーターの選定

全体の進行とコーディネーターの役を、副実行委員長でありまた、芸術文化協会長である方にお願いしたことから、講座という堅苦しさがなく、終始和やかな雰囲気の中で進めることが出来た。

３．今後の課題（実行委員会のまとめより）

オープンカレッジの目的をどこに置くのか？　広く多くの人に視聴してもらうのか、それとも内容の充実をねらいとするのか、それによって内容や方法が違ってくると思う。現段階としては、より多くの人にオープンカレッジを知ってもらい、受講してもらうことが先決である。そのためには、人を惹きつけるための楽しみや、イベントが必要になってくる。

また、単なる映像を視聴するだけでなく、みんなの期待する双方向性をより充実させ、公開講座をもっと身近なものとして利用してもらうことが必要である。

そのためには、広報活動に力を入れるとともに、各施設を利用した地域活動との協力体制が大切である。

尾花沢市学習情報センターでは、今回受講して頂いたみなさんからの強い要望があり、今回の続きとして『イタリアギリシャ講座』篠塚千恵子教授の講義を、尾花沢で開きたいと考えております。また、今回を第一歩とし、いろんな講座を地域活動に生かせるよう努力していきたい。

尾花沢市学習情報センター

開会の挨拶

受付の様子

エル・ネット「オープンカレッジ」講義の視聴

受講会場

４．アンケート集計結果

回答人数　40名

性別・年齢別

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
男			4人	2人	6人	4人	16人
女	2人	1人	5人	8人	5人	3人	24人
計	2人	1人	9人	10人	11人	7人	40人

職業

家事手伝い	１人	自 営 業	４人
農　　業	４人	学　　生	１人
会 社 員	３人	団体職員	２人
主　　婦	10人	ピアノ講師	１人
公 務 員	２人	無　　職	12人

(1)　オープンカレッジを、何で知りましたか？

図書館　５人　　チラシ　17人　　市報　10人　　テレビニュース　１人

女性会議　３人　　新聞　１人　　友人　３人

(2)　講義の内容は、いかがでしたか？

・今までの自分の関心とは違う、もう一つの新しい見方が出来るようになった。
・時代と共に変ってくる表現と、それを支える制作者達の精神のあり方が、刺激的でおもしろかった。
・難しい所もあったが、とてもおもしろかった。
・専門的であったが、わかりやすく興味をそそられる内容であった。
・わかりやすく、楽しい講義でした。古代ギリシャ人の生活や時代背景と当時の美術との関連性などに、興味が湧いてきました。
・得意でない分野でしたが、眠気にもならずわかりやすかった。
・ハイビジョンホールでの講義は、あまり良くなかったが、大学での講義は大変良かった。
・久しぶりに講義に出会った感じで、楽しかった。
・講義の理解度は30%位。でも、そういう時間が大好きです。
・ギリシャを思い出しながら、聴講し懐かしく思います。
・事前に勉強していくべきだった。
・多少映像の乱れはあったが、新たな視点を与えてくれた感があった。
・美術の専門知識がなくても、堅ぐるしくなく興味がもてた。

〔3〕 これからもまた、参加したいと思いますか？

・参加したいと思う。（40名全員）

〔4〕 今後、どのような内容の講義を望みますか？

・絵や音楽など、芸術に関したもの。
・「生きる」ということ、自然の美しさ、生態など。
・芸術、文芸、環境など、心を広められる講義。
・都市における街並みとデザイン。
・目本の美術史と芸術
・西洋美術史の講義継続。
・情報杜会とまちづくりなどの、清報に関するもの。
・歴史的なもの。
・パルテノン神殿だけでなく、他の遺跡も勉強したい。
・世の中のしくみがわかるような内容のもの。
・歴史や文学。
・東北の歴史や遺産などの講義。
・各国の政治事情。
・京都、奈良の古寺などの講義。
・目本仏教美術。
・イタリアギリシャの講義。
・出来るだけ幅広く、いろいろやっていけたら良い。
・科学的な講座もおもしろい。
・水、ゴミ、温暖化問題にっいて。
・東洋（インド）美術。
・風俗、民族学など。
・目本、外国の神話。
・中国文化について。

〔5〕 全体の内容は、いかがでしたか。

・焦点をしぼっての学問的なアプローチだったことは、ふだん接することのまれな分野であるだけに興味深かった。慾をいえぱ、より一般的な内容の最盛期の代表的な彫刻とか、文学演劇、思想史との関連においてみたギリシャ美術を希望。
・無料で驚いた。また、参加者の年代も、若者から70歳位の参加があり、良かったと思う。
・一日の流れが変化したので、講義に集中でき良かったと思う。
・大変内容の濃いオープンカレッジでした。
・専門的で深い講義を聴く機会を持て、また、大学を見学出来たことに、非常に感謝する。
・わかりやすい講義と映像で、大変結構でした。
・尾花沢→芸工大　ロスタイムがもったいないと思います。
・質問の時間が大変短いと思いました。教授を囲んでのフリートーキングなどがあれば、面

白いと思います。
・内容は、ほぼ理解することが出来、気持ちが若くなったような気持ちです。
・学生食堂で食べるところが良かった。
・大変勉強になりましたが、初歩的なものから入ったら、もっと良かったと思う。
・１日だけでなく３日間も通ったら、大学生の気分になれただろうと思う。
・映写があり、特別講義があり、現地見学がありで、大変良い内容だったと思う。
・楽しくゆったりした日程で良かった。
・芸工大での直接お聞きしたのが、何倍も素晴らしいものでした。何時も出来ないでしょうから、エルネット＋何かでやられては。
・２～３日間の長期講義に期待する。
・スライドを利用し、堅ぐるしく無く、とてもわかりやすい。
・午前の講義では、映像が乱れており見にくかった。大学では、学生の学習内容等も見聞出来る場もあった方が良いのでは。
・バスの送迎なので、安心して参加できた。
・もう少しゆっくりと大学を見学出来れぱと思いました。
・テキストの内容についていけるレベノレで、よかった。
・ギリシャに行きたくなりました。

〔5〕 その他、ご意見がありましたら、何でもお書き下さい。
・せっかくの資料（テキスト）だが、やや粗雑だった。何よりも資料の写真版が、甚だお粗末。モノクロでも鮮明に。また、多少お金がかかっても、版型を大きくしてほしかった。
・予定人数を倍にしてまで、受け入れてくれたことに拍手。
・いつの時も「学ぶ」ということは、素晴らしいことだと改めて感じました。平凡な日々の中で、とてもいい刺激になります。
・市民の教養となったり、心を広める新しい企画をどしどし進めてください。
・尾花沢市においても、政策等においても大学の専門的な知識を生かせれぱ良いと思う。
・ネットワークを利用して、月１回位他の講義を聴講してみてはどうか。
・テキストの文字を、もう少し大きくしてほしい。
・今後もいろんな企画を楽しみにしています。
・年に１回なら、せめて２日間あったら全体が見えてくるような気がする。
・しっかり勉強させていただいて、その後みんなでギリシャに行けたら最高ですね。
・残り少ない人生でも、機会があれば勉強したいと思いました。
・もう少し短い時間であれぱ良い。
・新しい世界を知る機会が出来、心豊かになりました。
・芸工大体験は、いつもの生活では出来ないことなので、みんないい顔をしていたと思う。
・図書館の活用を、私自身検討し利用したい。
・この際、ギリシャへの研修を計画してはどうか？　ぜひ参加したい。
・通信講座に、感動しました。
・もう少し時間が長くても良い。途中で小休止して、再度聴講するようなシステムが良いと

思う。

・高齢化社会人として、思いがけない体験をし、学食も体験出来、充実した一日でした。

・篠塚教授が尾花沢で講義してくれることを、期待しています。

・飲み物などがあったら良かった。

・映像だけでなく、今回のように内容に関連した場所を見学するコースがいいですね。

（山形県尾花沢市学習情報センター主任　井上慶子）